

拝啓「おやじさん（ハナ肇）」様

「おやじさん、あなたは私にとって師匠でも恩人でもありません。芸能界という特殊な世界での親だったのです」

私はおやじさんがガンとの長い戦いによって、最期を迎えるときのことを今でも忘れることができません。おやじさんのガンを知らされていた、内々の関係者は、それぞれ心のどこかで、おやじさんにその時が来るということを覚悟していたと思うのですが、私も改めて、奥さんの葉子さんから自宅に「島崎君、おやじさん、もうだめかもしれない、早く来て」という電話をもらった時は、さすがに気が動転してしまいました。とりもなおさず急いで家を出て、タクシーを拾い、おやじさんの入院している病院に向かいました。今起きている現実と、これから多分起きてしまうだろうと

いう現実の前で、言葉にできない緊張感を感じながら、その一方で、ただボー然としている自分が、あの時のタクシーの中にいたような気がします。いろいろなことが頭の中をよぎりました。

新宿コマ劇場の座長部屋で、初めておやじさんに会い、「弟子にしてください」と頭を下げた時のこと、そして、その時私を見つめたおやじさんの目が、見られている私のほうが動揺してしまうくらい非常に鋭かったこと、まるで私の心の中すべてを一瞬にして見透かしているようなおやじさんのまなざしを感じ、私も本気だという気持ちと、覚悟しているという気持ちとをなんとか伝えていたがため、おやじさんの目を見返し、絶対おやじさんの視線から自分の視線をそらさなかったこと、付き人として働き出し、はじめておやじさんに靴下を履かすことになった時、

おやじさんのつま先とカカトをあげるタイミングに私がなかなか合わすことができず、両方の靴下を履かすのにずいぶん時間がかかってしまい、怒られてしまった事、時間がおしたりまいたり、たとえ昼食休息でも、その日のおやじさんの食べたいものを、そして、それを
出前してもらおうタイミングに気を使いながら、抜群のタイミングで、楽屋に出せた時、それを素直に喜び、私をほめてくれる、おやじさんの子どものような無邪気な顔、そんなこんながああ病院に向かうタクシーの中で、鮮明に、まるで昨日のことのように思い出されてきました。しかし、私は、不思議と哀しい気持ちにはなっていませんでした。正確には哀しい気持ちを感じる余裕がなかったのかも知れませんが、今起きている現実を頭の中で分かっていたとしても、それを心の中で実感としてとらえられなかったのかも知

れません。病院に着いた時点でも、まだ私はそうでした。実に自分でもしっかきりしていたと思います。そして、玄関から廊下を渡り、エレベーターに乗った時点でもそうでした。しかし、その乗ったエレベーターがおやじさんの部屋がある階に近付いてくる頃から、おかしくなってきたのです。今起きている現実、そして、今から起きるだろうと思われる現実がはっきりと実感として私の心の中に忍び寄ってきたのです。そして、おやじさんの部屋がある階にエレベーターが着いた頃には、自分でもどうしたんだろうと思うくらい、ボロボロ涙が出ていたのです。一瞬の間に、目をばばかれないほど涙が出てしまっていたのです。そのあふれる涙で、目の前が二重にも三重にも見えってしまう景色の中に、同じようにかけつけたクレージ―キャッツのメンバーの今は故人となってしまう植

木さん、そして安田伸さん、そして今もまだまだお元気な谷さんの顔が見えました。私はもう、そんなみなさんにも、ろくに挨拶ができないくらい、涙にまみれてしまっていたのです。それは、自分でもほんとうにどうしたんだと言わんばかりの涙です。病室に入って、奥さんの顔を見ても、そして、そばでずっと付き添っているなべおさみさんの顔を見ても、何も言えませんでした。励ましの言葉もかけられませんでした。そして、息もたえだえのおやじさんの顔を見ても、何も言えませんでした。何もできませんでした。ただ横たわっている、おやじさんの足元で、声にならない声を出して、ただ泣いているだけでした。直立不動で泣いていました。なべおさみさんがおやじさんの耳元で「おやじさん、島崎が来ましたよ」と言ってくれたのを覚えています。それでも何もできませんでした。ただ直立不動

で泣いているだけでした。私はもうあの時点で四十歳の声が聞こえるぐらいの男だったのです。そんな男が、まるで子供のようになり、自分にとっていくらかかけがえのない人が最期を迎えようとしているとはいえ、周りの人たちにしっかりと対応も出来ないくらいに泣いていたのです。今から考えれば、私は病院のエレベーターに乗り、今まさに起きようとしている現実を私の心の中で実感として感じ、それを事実として受け止めだした頃から、なぜだか分りませんが、年齢が逆行していったような気がしてなりません。おやじさんの部屋が近づいてくるに連れ、年が若くなっ
ていき、昔に戻っていったような気がしてなりません。そして病室に入り、おやじさんの顔を見たたん、私はおやじさんの付き人をし出した十八、十九歳の頃の青年に戻ってしまったような気がしてなり

ません。私はいくつになっても、おやじさんの前では、付き人だったのです。ボーヤだったのです。タレントとして、いつちよ前にめしは食っていましたが、おやじさんの前では付き人だったのです。ボーヤだったのです。おやじさんはある程度ひとり立ちした私を認め、立ててくれたかもしれませんが、私の心がそうだったのです。私の心の中では、ことおやじさんとの関係においては、ちっとも年を取っていませんでした。おやじさんに、新宿コマ劇場で頭を下げた、十八、十九歳の青年のままだったのです。それはもう、動物のすりこみと同じようなものなのでしょう。私には、ちゃんと親がいますが、こと芸能界という知らない世界では、初めて、私という人間を拾い上げてくれたおやじさんのことを、私は親のように思っていたのです。そして、慕っていたのです。確かに生死の境をさまよっている、おや

じさんのベッドの足元で、泣いていたあの時の私は、
本当の血のつながった、おやじの生死に直面した、
子供のようにでした。おやじさん、あなたは、私にとって
師匠でも、恩人でもありません。芸能界という、特
殊な世界での親だったのです。そうです。おやじさん
は私にとって、芸能界での親だったのです。私はその
ことが、あ那时的涙ではっきりわかったような気がし
ます。

おやじさん、あれから何年経ったのでしょうか。天
国はどうですか？おもしろいですか？またグループを組
んで、リーダーはってタイコを叩いているんでしょうか？
遅かれ早かれ、いずれ私もそちらのほうへ行くことに
なるでしょう。その時はまた、突然おやじさんの前に
現れ、「弟子にしてください」ととんでもない事を言
い出すかも知れませんか。そのときはどうかよろしくお

願います。おやじさんが生きている時の、あの新宿コマ劇場での、あの時のように、「しばらく使ってみてから返事する」なんて言わないでください。そんなこと言われたら、私、泣いてしまいます。おやじさんにとって私はもう、海のものとも、山のものとも付かない、あの時の上京して来たばかりの、ヤンキーファッションの青年ではないのですから。

そちらのほうに行ったら、またかわいがって下さい。

身の回りの世話から始めさせてもらいます・・・

芸能界という、私からすればおやじさんという私の

親へ

その子どもより